

『竹取物語』の表現「いつつもちて」考

廣 田 收

はじめに

前々から疑問に思っていた問題について、確かな見通しがあるわけではないが、少しばかり今の考えを述べることで御許しをいただきたい。論考は本来、仮説の提示と論証の手続きが必要であるが、いくらか思い付きをただ並べて、今後の検討の方向性について、予測のあらましを記すばかりである。

さて、周知のとおり『竹取物語』の現存伝本のうち、流布本系統の最善本は武藤本（現在、天理図書館蔵）であり、これを底本として校訂された旧大系の冒頭部分は次のようである。

- (1) 今は昔、竹取の翁といふものありけり。
- (2) 野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。
- (3) 名をば「さかきの造」となむいひける。

『竹取物語』の表現「いつつもちて」考

- (4) その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。
- (5) あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。
- (6) それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

(7) 翁いふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。

(8) 子となりたまふべき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。

(9) 妻の女にあづけて養はず。

(10) うつくしきこと、限りなし。

(11) いと幼なければ、籠に入れて養ふ。

(12) 竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節を隔てて節（よ）ことに金（こ）がね ある竹を見つくること

重なりぬ。

(13) かくて翁やうやう豊かになり行く。(以下を略す)^①

物語としてひとつの完結した単位をなす、この部分の読解については、私も繰り返し検討を加えてきたところであるが、現存の『竹取物語』の本文はよく見馴れたものであり、その内容は読めば分かるという程度のことだと思われるかもしれないが、単純とみえてなかなか難解なところがある。

一 見セ消チ「いつつ持ちて来ぬ」に関する疑問

周知のとおり、かねてより、この物語にはそのままでは文意の通じない傷があり、難読箇所とされるところは数ヶ所を数えることが知られている。それら以外の箇所でも、最善本とされる武藤本にも書き入れ・訂正などの傍書が多く、読み進めて行こうとして立往生してしまうことが多く、現存伝本の本文については、なお問題なしとしない^③。たとえば、「手にうち入れて家へ持ちて来ぬ」とある、この傍線を付けた箇所については、すでに旧大系が「㊦㊦」「手に入れて」^④、「㊦」「いへ、」の「へ、」を消し「へ」と傍書。^⑤等「家に」と注している。新大系も「底本「へ、」を見せ消ち、「へ」を傍書」と注する。^⑥

代表的な他本でも、例えば、

大秀本

手にうち入れて家へ持ちて来ぬ

吉田本

手に入れて家へ持ちて来ぬ

古活字十行本

手にうち入れて家へ持ちて来ぬ

とある。また、古本系の代表とされる新井信之本には「手にいれていゑにもてきぬ」とあって、こちらの方が文意は通りやすい。ただ、「合理的」な本文が古態であるかどうか、疑わしいことは経験的によく知られているところである。

さて、前々から不審に思っていたことであるが、この箇所は、写本では「いつつ持ちて〔見セ消チ―傍書へ、〕もちて」と読める。

武藤本の他の箇所の「へ」の文字と「つ」の文字の書き癖も確かめてみたり、何人かの研究者にも尋ねてみたりしましたが、どうもまぢがいが無い。つまり、翁が五人の少女を家に持ち帰ったとすれば、書写の折、あるいは親本において見セ消チにした書写者は、それでは多すぎる、かぐや姫はひとりだと考えて、「家へ」と校訂したものがどうか。しかも、少女を五つというふうには、もの数で呼ぶのも不審に思える。

武藤本の奥書によると、文禄元(一五九二)年、也足軒中院通勝は前伊賀国司上原元純に書写を依頼しているが、再度慶長元(一五九六)年、民部少輔松下述久の所持していた本文をもって再校したとある。これを信じれば、このような見セ消チが初度の書写の折、

処置されたものか、初度の書写の折す、に親本にこのような書き入れがあったかは不明である。あるいは、再度の校訂の折に書き入れた可能性もあるが、よく分からない。いずれにしても、この箇所には、幾重にもわたる書写過程、成立過程が予想できる。

そこで、もともと少女はひとりでなければならぬと思考するような解釈が、むしろ合理的にすぎるのではないか、という疑問を手がかりにして『竹取物語』の本文の生成について考えてみたい。

それでは、ここからこの問題をどう展開できるのかというと、すでに文献の範囲だけでも『今昔物語集』『海道記』の他、「竹取翁伝説」(もしくは「かぐや姫伝説」)を記した文献が多数存在することが指摘されてきた。これらの成果を活用して、ひとつの解答の方向性、可能性を探ってみよう。

二 複数の少女たち

そこで、いわゆる「竹取翁伝説」と括られるテキスト群から、翁と複数の少女が対偶する事例を見ておこう。例えば『萬葉集』では「翁」が「九箇の女子」と出逢い、歌をかわす。「竹取物語」がひとりの翁に対して少女がひとりという、設定にみえる人数の違いは、どのように理解すればよいのか。

さて、①『萬葉集』巻第一六、三七九〇番は次のようである。こ

『竹取物語』の表現「いつつもちて」考

こでは便宜的に訓読を用いた。あまりにも有名な本文で、改めて引くのも気がひけるが、次のようである。

昔老翁ありき。号を竹取の翁と曰ひき、此の翁、季春の月にして、丘に登り遠く望むときに、忽に羹を煮る九箇の女子に伺ひき。百嬌儻く、花容止無し。時に、娘子等老翁を呼び嗤ひて曰はく、「叔父来りて此の燭の火を吹け」といふ。ここに翁「唯唯」と曰ひて、漸く越き徐く行きて座の上に着接る。良久にして娘子等皆共に咲を含み相推譲りて曰はく、「阿誰か此の翁を呼べる」といふ。爾乃竹取の翁謝へて曰はく、「慮はざるに、偶神仙に逢へり。迷惑へる心敢へて禁ふる所なし。近づき狎れし罪は、希はくは贖ふに歌をもちてせむ」といふ。すなはち作る歌一首〔短歌を并せたり〕

(A) 緑子の 若子が身には たらちし 母に懐かえ 襦袢の
平生が身には 木綿肩衣 純裏に縫ひ着 (B) 頸着の 童児
が身には 夾纈の 袖着衣 着しわれを (C) にほひよる
子らが同年輩には 蛭の腸 か黒し髪を ま櫛もち ここにか
き垂り 取り束ね 挙げても纏きみ 解き乱り 童児に成し
み さ丹つかふ 色懐しき 紫の 大綾の衣 住吉の 遠里小
野の ま櫛もち にほしし衣に 高麗錦 紐に縫ひ着け 指さ
ふ重なふ 並み重ね着 打麻やし 麻績の児ら あり衣の 宝

の子らが 打袴は 経て織る布 日曝し 麻紵を 信中裳な
す 愛しきに 取りしき 屋に経る 稲置丁女が 妻問ふと
われに遣せし をちかたの 二綾下沓 飛ぶ鳥の 飛鳥壮士が
長雨禁み 縫ひし黒沓 さし穿きて 庭に彷徨め 退り勿立ち
と 障ふる少女が 髻髷聞きて われに遣せし 水縹の 引帯
なす 韓帯に取らし 海神の 殿の莞に 飛び翔る 蝶羸の如
き 腰細に 取り飾らひ 真澄鏡 取り並め懸けて 己が顔
還らひ見つつ 春さりて 野辺を廻れば おもしろみ われを
思へか さ野つ鳥 来鳴き翔らふ 秋さりて 山辺を行けば
懐かしと われを思へか 天雲も 行き棚引ける 還り立ち
路を来れば うち日さす 宮女 さす竹の 舍人壮士も 忍ぶ
らひ かへらひ見つつ 誰が子そとや 思はへてある」(D)
かくの如 せられし故に 古 いじへ ささきしわれや 愛しきやし
今日やも子等に 不知にとや 思はえてある」(E) かくの如
せられし故に 古の 賢しき人も 後の世の 鑑にせむと
老人を 送りし車 持ち還り来し 持ち還り来し (巻第一六、
三七九一番)

反歌二首

死なばこそ相見ずあらめ生きてあらば白髪子らに生ひざらめや
も (三七九二番)

白髪し子らも生ひなばかくの如若けむ子らに罵らえかねめや
(三七九三番)

娘子らの和ふる歌九首

愛しきやし翁の歌に鬱悒しき九の児らや感けて居らむ
一 (三七九四番)
辱を忍び辱を黙して事も無くもの言はぬ先にわれは依りなむ
二 (三七九五番)
否も諸も欲しきまにまに赦すべき貌は見ゆやわれも依りなむ
三 (三七九六番)
死も生もおやじ心と結びてし友や違はむわれも依りなむ
四 (三七九七番)
何為むと違ひはをらむ否も諸も友の並並われも依りなむ
五 (三七九八番)
豈もあらじ己が身のから人の子の言も尽さじわれも依りなむ
六 (三七九九番)
はだ薄穂にはな出でと思ひてある情は知らゆわれも依りなむ
七 (三八〇〇番)
住吉の岸野の榛に匂ふれど染はぬわれやにほひて居らむ
八 (三八〇一番)
春の野の下草靡けわれも依りにほひ依りなむ友のまにまに

九（三八〇二番）^⑧

この竹取翁の歌群については、かねてより難解とされていることも、周知のとおりである。ひとまず、旧大系の訓に従って考えてみると、翁は「近づき狎れし罪は、希はくは贖ふに歌をもちてせむ」と述べているから、次の長歌は少女に対する讚美、讚頌の性格をもたなければならぬはずである。

長歌の構成は、(A) 幼年期、(B) 少年期、(C) 青年期、(D) 老年期というふうには、時の経過を追って自分がいかにもてはやされてきたかを説明し、(E) 棄老の故事を引いて末尾としている。ただ、長歌中に「誰か子そ」というキイ・ワードが埋もれているから、もし翁が若ければ少女に対して直截的に妻問いの歌を投げかけたであろう、という口吻である。翁は率直に求婚したわけではないが、少女たちは恭順の情を示している。この歌群の基層には翁が少女たちの名を問う、少女たちが翁に（名を明かし）従う意を表明するという、単純な伝承が潜んでいる。

ところで、土橋寛氏は「古代の春山入らないし山遊びの姿を反映していると思われるものが、万葉集卷十六の「竹取翁」の歌物語である」といわれる。すなわち「これは物語風の詞書と、竹取翁と九人の少女との問答歌」とから成るとして、「中国思想や神仙小説的脚色」はありながら「純粋な創作」ではなく「当時存在していた竹

『竹取物語』の表現「いつつもちて」考

取翁の説話を踏まえた創作である」と論じられている。さらに「山遊びの行事における老人と少女の「歌掛き」の説話化」であるという。土橋氏によると、その「物語を構成する主要素」として、

(1) 「昔一人の翁が「季春之月」(三月)、「登丘遠望」する。
(2) 「翁はたまたま、野竈を立てて春菜粥を煮ている少女に出逢う」。

(3) 「少女たちは翁に、火の番を頼んだかと思うと、誰がこんな年寄りを呼んだのかといつてからかう」。

(4) 「そこで翁は「おらも若い時や」という男盛りの時があった。人間は誰でもやがて年寄りになるもので、そんなに年寄りを馬鹿にするものではない、という趣旨の歌を歌う」。

(5) 「すると少女たちは翁の歌に負けて、「我は依りなむ」「我も依りなむ」と歌う」。

と分析する。土橋氏はこのような「五つの要素はすべて」「山遊びの行事の中にあるもの」だという(同書、六一頁。なお引用した(1)から(5)までの表現は、土橋氏の原文のママ)。そして土橋氏は「万葉ではその老人の歌に中心を置き(4)、娘たちのからかいを春菜粥の話にひっかけた会話にして(3)、そこまでを翁の歌の詞書の形にした」と捉えている(同書、六三頁)。ちなみに「老人に対する擲(ち)げ(か)歌は、若者だけでなく、異性の娘たちも歌った」

として「口々にからかう構想は、それに対する翁の歌と共に、歌垣における挿揄い歌と言返し歌の関係に基いたもの」であるとされている（傍点、原文のまま）⁹。

また、本田義憲氏は、古代インドのジャータカ「グッテイラ本生物語」に「古老と処女たちとの舞踏歌曲の唱和」があるという。そして同じ「系統の物語」が『漢訳増阿含經』卷第四八・一二八四や、『法苑珠林』卷二、「過去弹琴人經」などにあるという。特に『過去弹琴人經』は「老吟遊詩人の弹琴の間に第一天女から第六天女に至る舞曲が天上に生れた善業を歌ひ、最後に弹琴人が天女を讃へて歌つたのちに諸天女すなはち姿を没するといふ類型」をもつことを指摘する。本田氏は、トムソンの考察を踏まえて、「古代社会における舞踏歌曲唱和の構造の類推と暗示」をみてとる。すなわち今問題とする『萬葉集』卷一六における「竹取翁歌一群はすでに変改増広を経て複雑な要素を含む」が「古老と処女たちとの唱和した舞踏歌曲」であるとする。「聖なる竹を採るこの翁」は「おそらく誕生や生育に関連する意味をもつであらう」として、「青年式の一環としての歌垣に関与した痕跡を含む」という。さらに「竹取翁歌一群の成長過程における伝承の複合があらうか」と推論している。

本田氏は、具体的には「先行する七首の歌は、第一首のいはは兄処女（オモ女、狂言「若菜」）の歌につづいて、六処女（ツレ女）

の六首あるいは類句の句を含み、特にいずれも「我は（も）よりなむ」の結句をくりかへす」のであり「一対九で輪唱のやうな形式で歌つた」ものとみる。さらに「竹取翁歌漢文序は遊仙窟などを用ゐて旧伝承をより戲画的に潤色しながら神仙趣味化した笑劇的散文であつた」とみている¹⁰。

このような民俗学的もしくは宗教人類学的な知見に基き、改めて『萬葉集』の竹取翁伝説を見ると、両研究者の指摘する伝承性は、この歌群の表現の次元というよりも、歌群の基層をなす問題であるといえる。そうだとすると、『竹取物語』における先の見せ消子から想像される、「五つ」の少女という表現は『竹取物語』の基盤 ground となった素材の次元にありえた問題なのかどうか、九人の少女とは『萬葉集』が編纂される段階の「創作」なのかどうか、改めて疑問が湧いてくる。

少し抽象化していえば、翁は神を見ることのできる資格を備えた存在であり、翁に神が依る、翁に神が宿る、翁を通して神が顕現するという仕掛けの問題である。いずれにしても、翁と少女との対偶において、複数の少女の候補者と翁との対偶をどう理解するかである、と言ひ直すことができる。

ところで、興味深いことは、「竹取の翁」という呼称が、題詞に二度も用いられていることである。ところが、長歌には翁が「竹取

の翁」である必然性は表現されていない。ちなみに、「さす竹の」という語句は、「大宮の枕詞。語義・かかり方未詳^①」とされ、必ずしも「竹」と結び付くとは限らない。つまり、ここに、題詞と歌群との間に伝承の繋ぎ目の痕跡がほの見えるのである。私の考えは、両テキストの表現の次元ではあまり顕在化していないが、『竹取物語』の深層においても、『萬葉集』の竹取翁歌群の深層においても、翁が複数の少女から、ひとりを選び出す誓約の原理が働いていることを予想するものである。

三 複数の少女たちから選ぶ手続き

それでは次に、古代から中世に及ぶ竹取翁伝説の中から、翁と複数の候補者とが対偶する事例をみておこう。

院政期の『今昔物語集』の事例は、少女が少なくとも竹の中から「発見」され、翁と少女とは一対一の関係として対偶されている。鎌倉時代の『海道記』（鴨長明か、源光行か、一二二三年以降）は「竹林ニ鶯ノ卵、女形ニカヘリテ巢ノ中ニアリ」と、卵生ながら、竹林の中で見出されることが明記されているが、翁と少女は、一対一の関係として設定されている。ところが、次のような事例はまた若干異なっている。

② 『古今集注』（藤原為家、一二五九年前）

『竹取物語』の表現「いつつもちて」考

竹の中に鶯の巢をくひて、子を産めりけるが、如何にとかはしたりけむ、この親の鶯死にけり。この卵を翁獲りて、暖めける程に、皆鳥になりてあり。中に、一つの卵より、見目美しき女子出でたり。^③

③ 『古今和歌集序聞書三流抄』（藤原為頭か、一二七八〜八八年）

有時、竹ノ中ニ行テ見レバ、鶯ノカイコア、マタ有。其中ニ金色ノ子アリ。不思議ニ思テ、取テ婦テ家ニ置テ。^④

④ 『古今和歌集大江広貞注』（冷泉流、一二九七年）

竹の中に鶯の巢をくひて、子を生めりけるが、いかにかはしたりけむ、この親の鶯死にけり。あはれがりて、この卵子を翁取りて温めけるほどに、みな鳥になりてあり。なかに、一つの卵子の中より、眉目美しき女子出でたり。^⑤

⑤ 『和歌百首注』（二一条持基・一条兼良、一四三〇年）

數に鶯の卵三あり。取りて半日はかり置きければ、一の卵美しき女となる。^⑥

古代の『竹取物語』や『今昔物語集』における「竹取翁伝説」では、光輝く少女が竹の節から生まれるという枠組みをもつのに対して、中世日本においては、卵から生まれる伝説群とが併存していることは、すでによく知られている。しかしながら、両者は対立するというよりも、興味深いことに、『海道記』にしても、②③④のテ

キストにしても⑤は「藪」。竹藪か、神話学という宇宙卵の伝統を受け、天から降りてくる卵から王が産まれたとする神話を引き継ぐものでありつつ、「竹林の中で卵生する」というふうには、竹と卵のモチーフは、すでに複合している、とみることが出来る。

さらに、右のような事例において、私が興味を持つのは、卵か竹かという違いとともに、複数の子の中から「ひとりの少女」が選び出される過程、processが潜んでいることである。

つまり、このような事例を対照させると、『竹取物語』では、どこから生まれるのかということ、出合いの過程が整理されていることが分かる。すなわち、逆にいえば、翁と少女を一對一で対偶させたところに、『竹取物語』本文の独自性がある、ということになるだろう。

四 昔話「桃太郎」における誓約

それでは、物語における翁と少女との対偶関係を考える上で、昔話「桃太郎」を参照してみたい。ただそのように言うと、この考察の論理展開において、昔話を持ち出すことは唐突にすぎる、飛躍していると思われるかもしれないが、ここで私は物語と昔話との間に表現上の直接的影響を云々するつもりはない。私は古代物語の深層に、神話の枠組みを想定するという立場をとる。単純化していえば、

文献文芸は、神話や昔話など口承文芸を母胎とすると考えるからである。すなわち、物語は神話の枠組みに基いて生成するという考えに立って、以下考えをめぐらしてみたい。

かつて柳田国男氏が、昭和八年（一九三三年）に『桃太郎の誕生』を刊行し、古代神話を復元するために昔話研究を開始したことは周知のとおりである。柳田氏は昔話「桃太郎」に「神子降誕の神話」を透かし見ようとされたといえる。その後、昭和二年（一九四七年）に『口承文芸史考』を刊行して、それまでの昔話研究を総括している。この柳田氏の研究については、昔話を神話化しているという指摘を始めとして、さまざまに批判が重ねられてきたことはよく知られている。ただ、語りという叙述、表現の問題として、物語に昔話を対照させることはそう無謀なことではないであろう。

何が問題かという点、昔話「桃太郎」は、婆が川で洗濯をしていると桃が流れてきて、婆がこれを持ち帰り、割ろうとすると勝手に桃が割れて小童が誕生したという話柄である。

さて、そこで日本昔話の採録事例には、流れ寄るものが複数の形をとるものからひとつを選ぶという手続きが認められる。それらの中から代表的な事例を幾つか挙げてみよう。

① 「桃の子太郎」

むかし、翁と婆と居だでおの。婆あ「今日あ、空も良えし、川

さ洗濯しに行く」とというごどで川さ出出がげで行て、一
所懸命洗てえでおな。／したば、上の方から、

赤え箱コど白え箱コど、二つ流えで来たわけだ。／ほう、何
だおだろ？、二つなば欲たがれみでえで（原文注、みたいでよ
くない）やづがねえ。赤え箱ばり捨て行ご。／赤え箱コ、こつ
ち来え。白え箱コ、そつちや行げ。赤え箱コ、こつちや来え。
白え箱コ、そつちや行げ。／ど、こう言たは、白え箱コ流えで
行たども、赤え箱コあ、プブラ、プブラど、婆あ方さ、来たけ
でおの。

（『話の三番叟―秋田の昔話―』¹⁹）

ここに見える唱え言は、爺が赤い箱と白い箱からひとつを選ぶと
いう形式をもつ。この形式は、結局あれかこれか、二者択一の中で
幼形の神の誕生を期するもので、神の子を選び取るところに誓約の
原理が働いている、ということができる。

ちなみに、その後、婆が中を開けると「大きな桃の種」が入って
いたので、「糠やらさ」を入れて「植えておげば」と「播えておだ」
と、一週間ほどたつと「何処がで童子の泣ぐ声すでおな」と、
見ると「播えておだ桃の種あ、ポカッと二つに割えて、大っきだ男
の子、生まえて居だでおの」という（同書、九三―四頁）。

昔話を対照させる上で、論点は、誓約の原理とともに、桃が勝手

に割れて、神話において神自らが聖性を顕現する枠組みを、昔話が
なお保管しているということである。

②「桃太郎のむがし」

むがし、むがし。／ある処さ爺と婆どが居だけど。二人の中
には子供がいないけど。あつ時、婆さが川さ洗濯に行つたれば、
川上の方から何が流れできた。「あれ、あれ。何が流れできた
な。ずい分赤けて美すものだ」て、見でれば、それは赤け
こん袋（原文注、小さな布を結び接合させて作った巾着型の小
袋、正月札、盆札の品物を入れて持運ぶ）入つたもので、わっ
くど見だれば青いこん袋も後がら流れでくると。それで婆つあ
つだして（顔を水に向けて）呼ばつた。／赤げものこつちや来
い／青いものあつちや行げ／て、するど水の流れがそうなつて、
赤げながブンカ、ブンカどこつちさ行くように流れできた、手
に持つて見だらば赤げ桃が出はつてきたな。

（『真室川の昔話 鯉の大助』²⁰）

①は、赤い箱と白い箱、②は、赤い袋と青い袋というふうには、昔
話の語り方に差異はあるが、これらの昔話から分かることは、爺が
①誓約によって神の子を選び取る手続きがあること、さらに②神の
子がおのずから顕現することとの二点である。

また、②の事例でも、その後、婆は爺が帰ってきたら一緒に食べ

ようと「仏様さ上げだだ」ところ、「仏様がらおろして切るべし
たら桃パクツと口あげで中がら、小さい子供が生まれだ」という。
桃を割る前に、子どもが誕生したとする。人の働きかけによるものでは
なく、神格みずからが顕現するのであり、これはまさに昔話の古
層をなす神話の痕跡とみられるところである。

五 日本の祭祀の枠組み

いうまでもなく『竹取物語』では、少女は翁によって竹の節の中
に見出される。にもかかわらず、光輝く少女が、(竹とは直ちに結
びつかないようにみえる)月の光の中で「月の都」に帰還するのは
なぜか。あるいは、逆に月の光の中で誕生しないのはなぜか。い
ずれにしても、話型として、竹からの誕生と月への帰還とは首尾が対
応していないようにみえる。

それでは、竹から光輝く少女が発見されるという、表現の枠組み
はどのようなものか考えてみたい。柳田国男氏は『日本の祭』にお
いて、次のようにいう。

1 日本では「祭」というたった一つの行事を透してでないと、
国の固有の信仰の古い姿と、それが変遷して今ある状態にまで
攻まってきている実情とは、うかがい知ることができない。そ
の理由は、諸君ならば定めて容易に認められるであろう。現在

宗教といわれる幾つかの信仰組織、たとえば仏教やキリスト教
と比べてみてもすぐに心づくが、我々の信仰には経典というも
のがない。
(「祭から祭礼へ」²¹)

2 神々の降臨、すなわち祭場に御降りなされるということは、
私の信ずる所では古くからの考え方であった。(同、三七頁)
3 つまりは参るといのは元は籠るということも同じで、ある一
つの祭典に参加することであった。(同、四四頁)

4 祭場の標識に竿を建てるというだけは、ほとんど最初からの
約束といつても誤りはない。ひとり日本のみでなく、いやしく
も神が空から降りたまうものと信じていた民族ならば、皆これ
を立てたであろう。すなわち大空を行くものの、これが一つの
目じるしだったからである。(同、四六頁)

5 祭には必ず木を立てるということ、これが日本の神道の古今
を一貫する特徴の一つであった。(「祭場の標識」²²)

柳田氏によれば、日本における祭祀は、祭場に木を立て、人々の
籠りのうちに、神が木に依り顕現するという枠組みをもつという。

先の『萬葉集』の歌群において、少女たちが翁に、情動的、情愛
的に「依る」と表現されるところ(表層)には、表現の深層に、神話
的な「依る」という仕組みが潜む。少女たちは翁に依ることで、翁
が聖化されるとともに、小童の形姿をもつ神仙としての存在を顕現

させるという仕掛けがあるといえる。物語の表現としては、翁と少女というふうな、人物設定され対偶化されているが、神話的にいえば、少女は翁を通して顕現するのである。翁は少女を神として顕現させる仕掛けである。したがって、いわずもがなことを申し添えれば、『竹取物語』は、東アジアにおける卵生神話の枠組みに対して、木に依る神の顕現という枠組みを採用しているとみなせる。

六 神話の秘義性と伝説の遊戯性

次に、柳田氏が昔話「桃太郎」を論じる際に話題とした神話の事例をみよう。

賀茂神社の祭神である賀茂建角身命の神話を伝える「山城国風土記」逸文では、異伝があり、昔話における婆の洗濯は、神話では玉依姫の褌に対応しているとみることができる。つまり、柳田氏の考察を私に言い直せば、この「桃太郎」型の伝承は深層、もしくは基層に神話を潜めているといえる。

1 『秦氏本系帳』（『本朝月令』の引く）（B）

（A）次曰玉依日売、於石川瀬見小川之遊為時、丹塗矢自川上流下、乃取挿置床辺、遂感孕生男子。

（B）初秦氏女子出葛野河、瀚濯衣装、時有一矢、自上流下、女子取之還来、刺置於戸上、於是女子無夫懷妊、既而生男子、

『竹取物語』の表現「いつつもちて」考

2 『延喜式神名帳頭注』（中世以降か、古写本は大治二（一一二七）年）

次曰玉依姫。玉依姫。於石川瀬見小川之辺為遊時。丹塗矢自川上流下。乃取挿置床辺、遂感孕生男子。

2 『袖中抄』卷第一七（顕昭、文治元（一一八五）年、建久初年以降か）

次曰玉依日売、於石川瀬見小川遊為時、丹塗矢川上流下、乃取挿置床辺、遂感孕生男子、

3 『山城国風土記』逸文（卜部兼方、正安三（一一三〇）年）

玉依日売、石川瀬見の小川に川遊びせし時、丹塗矢、川上より流れ下りき。乃ち取りて、床の辺に挿し置き。遂に孕みて男子を生みき。

4 『二十二社註式』「賀茂本縁事」（卜部兼右、一五一六〜七三年）

其次於玉依日咩止云布。一日洗衣鴨川。一箭流来。鴨羽加筈。女取婦家挿簷牙。已而娠男。

5 『諸社根元記』（江戸初期）

建角身命乃女子、其御名乎玉依日売止申須、此神彼瀬見乃小川仁天道遙乃時、川上与理一矢流礼下留乎取天床辺仁置、他理之予利、玉依姫胎天生多留御子、於別雷止申須、

おそらく玉依姫による禊と祭祀は秘義的である。灵力を備えた存在の依り着くという義をもつ玉依姫のもとに、神の子が依る、依り着く。玉依姫が、川で「遊び」をしたという表現には、「神遊び」という語があるように、神をもてはやす神事としての意味もあろうが、「逍遙」から「衣を洗ふ」「瀚濯衣装」という表現にまで至ると、神話の秘義性は馴化され、伝承そのものが俗化されたものとなっている、といわなければならない。さらにいえば、「川で洗濯する」ことを定型とする昔話は、最も遊戯的であり最も俗化されたテキストであるといえる。この差は、時代性の問題というよりも、テキストの成立してくる場が秘義的か、世俗的かによって異なるとみてよいであろう。

まとめにかえて

ここまで考えを進めてくると、『竹取物語』の本文に見え隠れする「五つ」という表現が、古代物語として妥当かどうかという、当初の「素朴な」疑問に対して、誤写や校訂といった解決法は、あまり意味をなささない。むしろ、テキストの構築性という視点からいえば、物語と昔話とが共有する基層に、神話の枠組みが潜むという理解から、『竹取物語』の日本的性格を見ることができるとはちがいない。すなわち、日本のテキストとして見ると、現存『竹取物

語』における翁と光輝く少女との出会いには、木に依る神の顕現と、誓約の原理という仕掛けを深層に潜ませているということが出来る。つまり、本稿で取り上げた「いつつもちて」とは、これが誤写の問題でないとするれば、いったい何を意味するのか。改めて問い直すならば、竹の節から得た少女を手に入れて持ち帰り媪に渡そうとするときに「五つ持ちて」というのは、なお不審である。すでに選び出しの誓約（うけひ）は完了しているとみられるからである。

あるいは、輝く少女の発見から、ただちに翁がこれらをわが子だと言挙げする、(7)「翁いふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中ににおはするにて、知りぬ」、(8)「子となりたまふべき人なめり」とて」という唐突な展開も、深層に問答の繰り返しが想定されてよい。そのことは、口承文芸の次元ではなく、まさに文字文芸の表現として整えられているといえるのかもしれない。

むしろ本稿において考えてみたかったことは、今残されている『竹取物語』本文では、「翁／輝く少女」というふうには人物配置として単純化され、対偶化されているが、この設定の深層には、翁が複数の少女からひとりを選び出して行く過程が潜んでいるのではないか、ということである。

ただ、そうは言っても『竹取物語』を東アジアの広がりの中で定位することはまだまだ先の課題であり、少なくとも『竹取物語』と

いうテキストが、神話的な枠組みを抱え込みつつ、「合理的」に表現を整えた可能性がある。また、テキストが、重層的に構築されていると捉えることから考える必要があると思考するものである。

注

- ① 阪倉義篤校訂『竹取物語』岩波文庫、一九七〇年、九二―一〇頁。なお影印として『天理善本叢書 和書之部 竹取物語・大和物語』（編集委員 八木書店、一九七六年）を参照した。
- ② 廣田收「物語における繰り返し表現」『源氏物語』系譜と構造（笠間書院、二〇〇七年）。同『竹取物語』難題と思想『日本物語文学小史』（金壽堂出版、二〇〇九年）、同『竹取物語』の文体と構成——冒頭の表現を伝承の視点から読む——『説話・伝承学』（第二七号、二〇一九年三月）、同「昔話の語りと文体」桜井小菊の「尻さき爺（鳥吞爺）をめぐる」『文化学年報』（第六八輯、二〇一九年三月）など。
- ③ 上原作和氏には『竹取物語』の本文批評に関する、すぐれて詳細な分析がある（伝後光厳院宸翰『竹取物語』小六半切）本文に関する研究『日本文学論集』第三十号、一九八一年一月、『竹取物語』本文攷——冒頭部解析——『日本文学論集』一九八八年三月、『今昔「竹取」説話は古態を有するか——『竹取物語』の表現構造』『日本文学研究』第二八号、一九八九年二月、『竹取物語』伝本の本文批評とその方法論的課題——求婚譚の人称規定を例として——『中古文学』第四八号、一九九一年一月、など。学恩に感謝申し上げたい。
- ④ 阪倉篤義校注『日本古典文学大系 竹取物語』岩波書店、一九七〇年、二九頁。
- ⑤ 堀内秀晃校注『新日本古典文学大系 竹取物語』岩波書店、一九九七年

『竹取物語』の表現「いつつもちて」考

年、三頁。

- ⑥ 王朝物語研究会編『竹取物語本文集成』勉誠出版、二〇〇八年。南波浩『日本古典全書 竹取物語』朝日新聞社、一九六〇年、七〇頁。この扉の写真でも、古本系の新井本は確認できる。
- ⑦ 三谷栄一『竹取物語評解』有精堂、一九五六年（増訂版、一九八八年）、雨海博洋『対訳古典シリーズ 竹取物語』（旺文社文庫、一九八八年）、室伏信助訳注『新版竹取物語』（角川文庫、二〇〇一年）など。
- ⑧ 高木市之助他校注『日本古典文学大系 萬葉集』第四卷、一九六二年、一一―一七頁。
- ⑨ 土橋寛「国見の起源」『古代歌謡と儀礼の研究』岩波書店、一九六五年、五九頁。
- ⑩ 本田義憲「竹取翁歌拾遺」『澤瀉博士喜壽記念 萬葉学論叢』刊行会、一九六六年。
- ⑪ 小島憲之他校注・訳『新編日本古典文学全集 萬葉集④』小学館、一九九六年、七五頁、三七五―八番頭注。
- ⑫ 江口正弘『海道記の研究 本文編研究編』笠間書院、一九七九年、五三頁。
- ⑬ ⑦による。
- ⑭ 片桐洋一『中世古今注釈書』解題（二）、赤尾照文堂、一九七三年、二五〇頁。
- ⑮ 片桐洋一『中世古今注釈書』解題（二）、赤尾照文堂、一九七三年、二〇〇―一頁。
- ⑯ 片桐洋一『中世古今注釈書』解題（二）、赤尾照文堂、一九七一年、一〇六―七頁。
- ⑰ 出石誠彦『支那神話伝説の研究』（中央公論社、一九四三年）、三品彰英「かぐや姫の本質に就いて」『日鮮神話伝説の研究』柳原書房、一九

四三年(『三品彰英論文集』第三卷、平凡社、一九七一年。初出、一九三三年)。

⑮ 紙幅の都合上、すべての事例を掲げることではできないが、昔話のさまざまな採録記録集から私に得た話柄「桃太郎」四八一例のうち、一四四例において、川上から流れてくる箱もしくは桃に呼び掛ける、定型的な唱え言が認められる。この唱え言は「桃太郎」すべての事例に不可欠な要件ではないが、雪深い東北の事例によく見られるもので、昔話の中でも様式的に整った古態を記憶するものとみられる。

⑯ 野村純一・畠山忠男編『話の三番叟——秋田の昔話——』桜楓社、一九七七年、九二―三頁。

⑳ 野村純一編『真室川の昔話 鯉の大助』桜楓社、一九八一年、一四〇頁。ちなみに、調べた限りでは、昔話の採録事例の中にも、『聞書三流抄』のように沢山の桃が流れてくるものからひとつを選ぶ事例も存在する(山本節他『昔話研究資料叢書 西三河の昔話』三弥井書店、一九八一年、六〇頁、類話(7)「105桃太郎」には、「たぐさんの桃が流れてくる」とある。すなわち、物語の表現としては、誓約が概ね二者択一の形式として、典型化することはあっても、『萬葉集』の事例のように数多くから選ぶ形式も、伝承の可能性としてはありうる。

㉑ 柳田国男「祭りから祭礼へ」『日本の祭』角川文庫、一九五六年、三一頁。

㉒ 柳田国男「祭場の標識」『日本の祭』角川文庫、一九五六年、五三頁。

㉓ 国書逸文研究会編『新訂増補 国書逸文』一九三二年、二六六―七頁。

㉔ 『群書類従』第二輯、群書類従刊行会、一九八三年、二四七頁。

㉕ 橋本不美男・後藤祥子『袖中抄の研究』笠間書院、一九八五年、三九一―二頁。

㉖ 秋本吉郎校注『日本古典文学大系 風土記』稲浪書店、一九五六年、

四一四頁。

㉗ 『群書類従』第二輯、群書類従刊行会、一九八三年、二二二頁。
㉘ 佐伯有義編集校訂『神祇全書』(復刻版 第一輯、思文閣、一九七一年、四頁)。